

横光研究の最前線

中島 国彦

二種類の検閲、戦前日本と占領下

関川 夏央

メディア環境と「文学」のゆくえ

兵藤 裕己

十重田裕一「横光利一と近代メディア 震災から占領まで」は、これまで長く横光利一を研究対象としてきた著者の、横光を論じた最初の論文集である。本書の表題からもうかがえるように、時代とメディアとの格闘の実態を緻密に分析することを中心に、横光の時代に果たした役割を明らかにしようとしたものである。若き日の外国文学の翻訳が何を意味していたのか、昭和文壇において横光はどう活動したのか、文学と映画の交流という時代現象の中でどのように言語と向き合ったのかなどが、一つずつ明らかにされる。そして、「検閲」という言論統制の時代状況の中で、戦前から戦後にかけて横光作品がどのような屈折を強いられたのかが具体的に分析され、「上海」「旅愁」などの横光の作品が、新たな視点から論じられるのである。「時間」「微笑」など、残された自筆原稿の調査も、興味深い。

長く横光作品とメディアとの関連を分析してきた著者だが、本書の特色の一つに、戦後の占領期の検閲の実態を示すプランゲ文庫の資料の、現地での調査を踏まえた研究成果が組み込まれていることが挙げられる。全四部、全六章に組み立てられて上梓された本書は、正に、横光研究の最前線を示してくれる。

他の候補作もそれぞれ特色のある力作揃いであったが、十重田氏の著書の他に、選考委員全員の総意として納得いくかたちで推せる一冊が見出せなかったのは、誠に心残りである。

今回のやまなし文学賞・研究評論部門の選考会は議論沸騰して長引いた。候補作のすべが一長一短、というより、それぞれが一長も二長もある。さらに選考委員がそれぞれ説得力を持って推す作品が割れ、結局、統一困難な状態に陥り、この賞始まって以来初の一作授賞に落着いた。選考委員の苦衷を察していただきたい。

紛糾以前に選考委員が一致して推したのは、十重田裕一「横光利一と近代メディア 震災から占領まで」であった。

小説創作で果敢な文学的実験を重ねた横光利一が三十三歳で書いた「上海」には、内務省の検閲による多くの「伏せ字」が残された。一方、三十九歳から四十六歳まで書き継いで結局未完に終わった長編「旅愁」の戦後版と、四十九歳で亡くなる前年に発表した最後の小説「微笑」には、占領軍GHQ/SCAPの検閲を受けたにもかかわらず「伏せ字」はない。

検閲を経たことを、あえてしめす内務省式に対し、占領軍式は問題となる部分の「削除」「改編」によって、あたかも検閲などなかったかのように見せることを眼目とする。考え方が正反対である。

筆者は、横光の原稿と発表媒体上の表現、その労をいとわぬ点検作業によって、それぞれの権力が「不可」とした原文、それに対応した作家・編集者の直しをていねいに再現した。そんな緻密な作業によって、実験的であったと同時に、時代の風に吹かれ過ぎた結果、誤解されがちであった作家のリアルな姿を結像させた。みごとな仕事と思う。

わたしたちを取り巻くメディア環境は、二一世紀になって激変した。たぶん今世紀末には、紙の本は文学の主要な媒体ではなくなるだろう。そんな文学の行くすえを見定めるためにも、メディアと文学の関係の現時点でどう総括しておくか、文学の批評と研究に課されたすぐれて今日的な課題である。

日本の近代小説は、一九〇〇年前後に成立した。以後の二〇世紀は、書籍の流通・販売網の整備と、営業戦略の進展、また検閲と統制（自粛も含めて）という政治的な力学が、文学の表現形式そのものを大きく左右した時代である。そのような二〇世紀前半のメディア環境のなかで、横光利一は、なぜ「文学の神様」として祭り上げられたのか。

十重田裕一氏の「横光利一と近代メディア」は、横光のいわゆる「純粹小説論」が、じつは文壇ジャーナリズム（編集者）との共同制作であり、それがメディアによって文学の主導的な議論と位置づけられることで、その「純粹」文学論が、皮肉にも一九三〇年代の時局と密接に関わってゆくさまを実証的に跡づけている。文学とメディアとの今後を考えるうえでも、興味ぶかく、示唆にとむことの受賞作である。

やまなし文学賞の研究・評論部門は、例年、受賞作二篇を選んできたが、節目となる第三〇回の今年度は、残念ながら、二篇の選出にはいたらなかった。